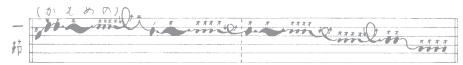


やんさノエ

会報

2006 No.6



発行 江差追分会

2006.9.1

北海道松山郡江差町中歌町193-3

TEL 0139-52-5555

FAX 0139-52-5544

ホームページアドレス <http://www.hakodate.or.jp/oiwake/>



江差追分の授業風景

「趣味の尺八」

北海道江差高等学校長 渡部泰夫

江差高校では、週に二回教室から「江差追分」の歌声が聞こえてきます。三年次生の選択科目に設けられているからです。私もときどき教室へ見学に行きます。四人の生徒が、江差追分会師匠会の指導を受けて、前歌・本歌・後歌の歌詞を理解しながら、懸命に取り組んでいる姿が目に見え込んできます。地域にこのような素晴らしい文化があることを、生徒自身が自然に理解していることを大変嬉しく感じています。

実は、私の趣味は尺八を吹くことです。まだまだ人に聴かせるほどの実力ではないのですが、楽しみながら吹いています。平成十六年四月に江差高校に赴任して三年が経とうとしています。こうして「江差追分」の本場に來たのも何かの縁だなと思っています。

現在、毎週月曜日に、尺八の指導を近江八声氏に受けています。いつも下手な私を、根気強く指導してくださり感謝しています。何とか期待に応えられるよう努力はしていますが、なかなか思うような音が出ません。しかし、いつも私が嬉しく思っているのは、転勤族である私を、他のお弟子さんと同じように親身になって指導してくださっていることです。本当にありがとうございます。

ゆくゆくは、生徒が「江差追分」を唄って、私が尺八の伴奏をできるようになることを目標として、これからも一層努力して行きます。

平成十八年度江差追分会総会

予算の圧縮で地区予選の自主運営方針協議 高齢化により熟年会員五〇%をこえる

平成十八年度江差追分会総会は四月二十三日江差町ホテルニューエスで開催され、全国各支部から出席の総代で本年度の予算や事業計画を原案どおり決定した。

平成十八年度予算総額は三、一一三万一千円、前年度より二二〇万円の圧縮予算となった。収入では町の財政事情から補助金が前年につづき一四〇万円減額したほか、支出では全国大会で九〇万円ほかを節減して運営してゆく予算内容になっている。追分会の運営も従来のように、町の

補助金に依存することが難しくなっていることから会員の自主自立が課題となっている。

本年度総会では全国大会の地区予選（全国一〇地区）を各地区の自主運営で行うことが提案され協議された。各地区予選は従来全国大会の統一的な運営を確保する方針から本部が一定の審査員を派遣していたが各地区に師匠資格者が充実しているので、可能な限り、審査員も地区で充足するという提案である。今後この方針で調整してゆくことが協議された。

高齢化による

一般・熟年出場枠の対応 会員数熟年五〇%をこえる

会員の高齢化が進む半面、新しい会員の参入が停滞気味で、熟年（六五歳以上）の会員数一、八一六八（五〇・二五%）、一般会員一、七九八八（四九・七五%）となり熟年会員が上まわった。現状から推移すると、この傾向は更に進行することが予想される。

本年度出場枠は従来の算出方式で、

一般一九二名、熟年八一名となっているが今後の検討課題として出場枠が協議された。当面は現状の方針を踏襲するが、今後は熟年の出場枠、熟年の年齢構成、決戦会の出場枠（現行二〇名）を総合的に検討しなければならぬという意見が出された。

なお検討課題の主な点として、次の二点があげられた。

一、第四十五回全国大会イベントの検討

明年平成十九年は第四十五回全国大会の節目を迎えることになり特別イベントが組まれることになることから、演出内容を明年に向けて検討することになった。更に全国大会の検討課題としては次の事項があげられた。

- (1) 第四十五回全国大会のイベント内容
- (2) 一般、熟年の割り振り、少年の部優勝者の扱い
- (3) 参加費、広告料

二、運営検討委員会答申事項の検討 答申事項を追分会で内部検討し、 反映できるものを前向きに検討する。

本年度事業の主な計画

- 一、江差追分全国大会
- 二、地区選抜大会
- 三、格付審査、師匠研修会



四、後継者育成
五、江差高校単位制講師派遣
六、第三十回「ふるさと民謡シリーズ」
へ追分派遣（大阪府）

（取材・松村 隆）



懇親会での子供達の江差追分と追分踊

江差高校が「江差追分」を授業 単位制選択科目で三年生、四人

地域文化を若い人たちに――

江差高等学校では、本年四月から新たに単位制選択科目に「江差追分」を選定し、江差追分会から派遣され

た正師匠浅沼和子さんが講師で授業をはじめている。

これから社会に出てゆく高校生に、

先人が北の風土を唄い込んできた「江差追分」を身につけさせようと単位制科目に取入れた。

江差追分を選択科目で授業に取組んでいるのは三年生、吉田信玄、吉田若菜、辻彩乃、中居麻衣の四人で、講師の浅沼さんは、追分が江戸時代から唄いつがれてきた歴史を織りませて唄の実技を指導している。

「江差追分は郷土が育てあげた最も優れた文化ですから、これほどまで全国の人々の心を惹きつけてきた背景から追分の真

実を若い人たちに理解して唄ってもらおうと思っています」

浅沼師匠自身も高校生のころから追分クラブで習いはじめ、師匠になってからは高校の追分クラブで指導してきたから自然に熱が入る。

「江差に住んでいると追分を聞く機会が多く、追分科目ができたので唄ってみたかと思つて選びました」

三年生一三五人のなかから四人は関心をもつて参加したという。

授業は週二回、二時間で四月からはじめ「せつど、本すくり、もみ」など八つの基本譜から習いはじめて漸く節の形を歌えるようになった。

「先生が面白いとえ話をして教えてくれるから授業が楽しい。少し唄えるようになるもつと授業の時間がほしくらいです」

吉田若菜さんはもつと覚えたいという。

単位制の追分科目ははじまったばかりだが江差高校の先輩には高校二年生で全国優勝した木村香澄さんや、高校生から追分に取組んで活躍している寺島絵里佳さん姉妹など多勢い

る。

「追分は江差高校だからできる授業で、全国にも例がないと思う。これから生徒も増してつづけてゆきたい。地元の文化を生徒が体得して地域で活躍するようになって欲しい」

渡部泰夫校長は地元の文化に取り組んで素晴らしいものを身につけて欲しいという。若い人たちが郷土の文化を習得することは自らの誇りを育む力になるだろう。



単位制の特徴とは…



- ①卒業に必要な単位数は変わりありませんが、2年次以降は必修の体育などを除いて全て自分の学びたい科目の選択授業となります。よって、一人ひとり時間割が異なります。
- ②2、3年次ではクラスの枠を超え、その科目を選択したグループでの授業となります。よって10名以下での少人数による授業もあります。
- ③生徒の多様な興味・関心に合わせ、「江差追分」「生涯スポーツ」「基礎看護」「評論研究」など本校独自の科目を設定しています。

江差高校「隴陵だより」

歌の出会い・・・・・・・・・・・・・・・・岩淵啓介

昔の浪花節に名文句があった。

「山と山とは出合わぬが

人と人とは出会うもの」

歌と歌とも出合うものである。

美空ひばりの歌った『みだれ髪』

(星野哲郎作詞、船村徹作曲)に、

「春は二重に巻いた帯

三重に巻いても余る秋」とある。

江戸中期に刊行された『山家鳥虫

歌集』(さんかちようちゆうか)に

は江戸時代初期からの全国六十六ヶ

国の民謡の歌詞が収録されている。

(岩波文庫版、1984年刊)

そこに河内の唄がある。

「こなた思うたら

これほど瘦せた

二重回りが 三重回る」

解説によると、すでに『万葉集』

に大伴家持の歌が載っている。

一重のみ妹が結ばむ帯をすら

三重結ぶべく わが身はなりぬ

こちらの方が激瘦せであった。

江差と縁が深い沖繩・石垣島の唄

「トゥバラーマ」で宮良康正が歌っ

ていた。

「思て通ゆらば 千里ん一里

またん戻らば 元の千里」

これも山城をはじめ、中世鎌倉時代から全国各地で好まれていた。

「こなた思へば 千里も一里

逢はず戻れば 一里が千里」

明治時代に大流行した『東雲節』

の名文句「何をくよくよ川端柳」も

『山家鳥虫歌』集に出ている。

「何を嘆くぞ川端柳

水の出ばなを嘆くかや」

お隣り韓国の詩の形式のひとつに

「時調」(シジョ)がある。十八世

紀の李王朝のころから歌われ出した

という。「時節歌調」の略であり、

「当代の流行歌調」の意味だという

(尹学準『朝鮮の詩ごころ 時調の

世界』講談社学芸文庫)。

李朝中期の女流詩人、黄真伊(ホ

アン・ジニ)は才色兼備で名高かつ

た。その数多い歌の中に絶唱とさ

れ、韓国人なら誰でも知っている

「時調」詩があるという。

冬至月(しもつき)の

長々しき夜を

二つに裁ちて

春の暖かきしとねに畳み入れ

君の訪い来る夜の短さを

延ばし延ばさぬ

心あたりのある詩句であろう。

江差追分でも歌う。

「待つ夜の長さを

四、五尺詰めて

逢うたその夜に延ばしたい」

頼山陽作という都々逸も同じ心。

「三千世界の鴉を殺し

主と朝寝がしてみたい」

起請文の地紙には熊野権現の使者

のカラスたちが印刷されていた。

この唄の字(音)数は「八、七、

七、五」で、初句が八音となってい

る。「七、七、七、五」の定型に比

べると、初句が字余りになる。

奇しくも、江差追分の名歌詞「か

もめの鳴く音に」と同じ「八音」の

歌い出しである。

こうした古今の歌詞を読み比べて

みると、似たような人間の折々の感

概を、自分で歌にしてみる可能性が

出てくる。「花に啼くウグヒス、水

に住むカハズ」も「いづれか歌を詠

まざらん」というわけである。

アイヌ民族の叙情歌謡のひとつに

「ヤイサマ」がある。

自作自演の歌であり、結びの文句

に「ヤイサマ・ネ・ナ」(これが自

分の心を述べる歌ですよ)と、リフ

レーン(折り返し)を付ける。

男が歌う「酒の唄」がある。

「ほんの一杯と違って

一杯飲んだら 二杯になった

ハイハイハイ

三杯飲んだら 一升になった」

青恥赤恥かいて後悔するまでを順

繰り歌う。

「笑わないでおくれ

さげすまないでおくれ

ヤイサマネナ

ハイハイハイ

(『知里真志保著作集2』平凡社)

女性が恋心を男性に訴える歌も当

然ある。

江差追分ほど歌詞が多様多種にわ

たり数が多いのも珍しい。その時代

その場にに応じて、「私の心の歌なの

ですよ」と「時調」が作られつづけ

て来たのだろう。

江差追分には「三大名歌」という

のがある。まず「かもめ」つづいて

「忍路高島」「泣いたとて」。最も

よく歌われる名歌である。

ここに自作の江差追分、「ヤイサ

マネナ」を加えてもよいだろう。

(追分会理事)

懐古・SPレコードを聞きながら(六)

江差追分を愛した見砂東楽師：高田 裕



見砂東楽(知障)師 大正10年

た。実際には、そういう追分が存在しないのだが、今日のように節廻しが定着していない時代に、江差追分に心酔するあまり、東京・札幌などを中心に追分流派をつくって普及活動をしたことをいう。

まだ江差追分をあまり意識せず、追分の進歩発展を願った人たちの追分であった。

その代表格であったのが見砂東楽(本名・松太郎、知障と改名)で、明治八年に石川県で生れ、昭和四〇年に埼玉県本庄市にて逝去している。

むかし発売されたLP盤レコードに『追分のしらべ』(東芝)というのがあって、江差追分を中心に松前追分、越後追分、信濃追分、秋田追分、南部追分、宮城追分、房州追分、出雲追分、豊後追分の十種類を聞きくらべる楽しみがあった。その他、戦前のSP盤レコードには、津軽追分というのものもある。

このように数々の追分があるなかで、江差追分は紆余曲折の変遷を経て曲譜や基準を定め昭和三八年以来全国大会が開催され、いまや各追分の頂点となっている。

しかし、かつて古老の追分談義のなかで「東京追分」というのもあつ

彼は明治三十一年、苦小牧王子製紙会社に勤めているときに追分の虜になり、大正五年に道教委の前身・北海道連合教育会の委嘱により再び来道してから一層夢中になり、従来の各種追分節の旋律を比較研究し、見砂流あるいは東楽流とよばれる追分を創始した。

また音楽学者の田辺尚雄と共に、玲琴(巨大な三味線をチェロのように弦で弾く)という新しい楽器を考案して追分伴奏にとりいれ、JOAK愛宕山放送(大正一四年・開始)から数多く追分をラジオ電波にのせた人でもあった。この放送日は「俚謡放送の回顧」(昭和一二年、町田嘉章編)に紹介されているが、まだテレコがない時代で如何ともしがたい。しかし、遺された多くのSP盤レコード、とりわけビクターやポリドールの「玲琴入り・追分節」は貴重な一曲となっている。これは当時の文部省推薦をうけ、大変好評だったようだ。

さらに、彼の追分の著書が二冊ある。『俚謡正調追分節百種文句集』(大正九年)と『民謡改善・追分節宣伝・全』(大正十年)である。

戦前の話になるが、彼は札幌に住居を移し仲村光弘(本名・弘子)や細川半月(本名・直一)などの高弟を育て、彼らと一緒に道北地方や樺太、南は名古屋・大阪・台湾まで追分の宣伝普及をして歩く。その合間に、東京の寄席や三越劇場に出演をし、大日本追分節連合会の最高顧問の要職についている。

戦後、郷里の金沢に一度もどり、昭和二五年には「北陸追分研究会」を創立するが、数年後これを実弟の見砂玄国に任せて再び上京する。

こうしてみると、明治・大正・昭和の三時代にかけて札幌・東京・金沢中心の追分行脚人生といえる。

このような話は、戦後マンボ、サンバなど幅広いレパートリーを誇り、ラテン音楽ブームを作った「東京キューバン・ボーイズ」の設立者・見砂直照(本名・保雄)による。彼は中南米はもとより海外公演も精力的に行っていたのだが、江利チエミの「さのさ／五木の子守唄」、三橋美智也の「津軽じょんから節／タント節」など得意のラテン・リズムで日本の民謡を盛りあげてくれて、軽音楽界で紫綬褒章を受賞している。

こうした彼の日本民謡に対する理解と貢献は、クラシックを学ぶために入学した東洋音楽学校時代に民謡研究の大御所・町田佳声宅に寄留していたことによる。その直照こそ東楽のご子息であったのだが、二人共この世にいない。今年で見砂東楽、生誕一三〇年。(追分会理事)

※江差追分会館・蔵書参照。

北前船の水主と女たち

館 和夫



紀興之著『越後土産』(1892)より

..... 館 和夫

ていると思われる古い追分節の古い文句をいくつか掲げながら彼らの日常の生活感情の一端を探ってみることにしたい。

十七世紀の半ば過ぎ、宝暦・明和の頃から江差地方には、前代までの北国船に代わって帆走性能の優れた弁財型の船が来航するようになった。大阪を基点に、西回りで北方(北前)の日本海沿岸を往復する、三百石から五百石、ときには千五百石にも及ぶ積載量を誇るこれらの買積船には、船頭のほか、表(おもて・航海士)知工(ちく・会計)親父(水夫長)、若衆、炊(かしぎ)などと呼ばれる多くの水主(かこ)が乗り組み、春から秋にかけて一往復ないし二往復、数ヶ月にわたる商用の旅に従事した。

積荷は大阪からの下りには木綿、塩、砂糖、陶器、紙、鉄、わら工品、瓦、石材など、一方、松前地からの上り荷には鯨粕、胴鯨、身欠鯨、数の子、昆布、煎海鼠(いりこ)、ときにはクサマキとよばれた蝦夷檜(ヒバ材)などがあてられた。

彼らの固定給は僅かなものであったが、船頭には自由に処分できる積荷の「割前後」に上る「帆待ち荷」があり、水主たちにはそれより若干少ないが「切出し」と呼ばれるそれぞれの身分に応じた歩合給があって、船頭の才覚や商品相場次第では、かなりの収益を上げることができた。しかし、何分造船技術や航海術の未発

達な時代のことである。航海の途中で難破することも多く、日ごろから「板子一枚下は地獄」という宿命的な無常観を背負いながらひたすら神仏をたのむ一方、

今宵一夜は緞子の枕(または飲めや唄えや今宵を限り)明日は出船の浪枕と、利那的、享乐的な船乗り気質で日を送る者が多かったようである。

沿岸各地の港で積荷の売買を済ませ、風もいよいよ出帆の時ともなれば、馴染みを重ねた女とも否応なく別れなければならぬ。そのようなときの弁財衆の苦しい胸の内を吐露したと思われる次のような追分の文句が今日に伝えられている。

碇起こいて帆をまくときにや
しんから涙がホロと出た

関西弁を含んだ真情あふれるこの文句は、かの信州追分宿における「追分析形の茶屋でホロと泣いたが忘ら



天保新選永代雑書万暦大成より

りよか」という馬子唄に通じるものがあり、追分節にこめられた人間の真情が、時代や風土、曲調の違いをこえて普遍的なものであることを示す何よりの証左といえよう。

さて、一方の港の女たちであるが、こちらも北前船の男たちに負けず劣らずの浮き草稼業で、多くの場合、前借を抱えて行動の自由が制約されるなど「苦の海」に身を沈めることを余儀なくされた悲しい身の上の女たちである。

気前良いとて船頭衆にほれて
付いちや行かれず 泣き別れ
(囃) ままになるなら一緒にいきたい
荒い波風少しも恐れぬ
苦を敷き寝の梶まくら

というように唄ってはみるものの、好きあった男についてゆくわけには行かない。つまり、身一つで荒海に乗り出した農漁村の二、三男と、貧しさの中でいつしか港の女にさせられた女の間には、所詮、ひととき浜辺でなき交わす鴉や浜千鳥といった程度のはかない自由しか許されなかったのである。

そのような数々の悲恋の陰に今日の江差追分につながる唄の醇化作用があったのだということ、現代の追分愛好者である我々は、今一度心の中にしっかりと銘記したいものである。

藩政時代の昔から明治の半ば頃まで、江差追分の情調の向上に寄

平成十六年の秋、江差追分会館の前庭に建立された追分記念碑には、江差追分の由来について「遠い昔、信州の浅間山麓に生まれた馬子唄は、北前船の船子や旅人達によってこの地に運ばれ、波の調べの中に北辺の風土と人情を唄い込んだ名曲、江差追分節となって美しく花開いた」と記されている。つまり、この唄の成立過程における、北前船の男たちの役割を大きく評価しているわけであるが、一方、この唄の情調を高める上で北前船を取り巻く往時の女たちが果たした役割も男たちに劣らず大きかったといわなければならない。

そこでこの小文では、彼らの境遇や、時代の雰囲気をもよく反映し

寺島絵里佳さんが

地域伝統芸能奨励賞受賞決定

日本各地に伝わる伝統芸能の技の継承に、日頃から地道を努力を重ね、その地域の伝統芸能を担って立つと期待され、周囲の模範となる貢献をしている将来有望な若い新人に贈られる「地域伝統芸能奨励賞」(財)地域伝統芸能活用センター)に、第四十一回全国大会優勝者の寺島絵里

佳さんが全国で一人受賞することになりました。

平成十四年度に同賞を木村香澄さん(第二十九回優勝者)が受賞しており、江差追分会から二人目の受賞になります。

受賞した寺島さんは、「これからも江差追分の真髄を求め、いつか人を



感動させることのできる追分を唄いたい」とさらに追分の道を極める決意を新たにしていました。

江差追分会の次代を担っていく若手女性ホープとしてこれからの活躍が期待されます。

なお、受賞式は九月八日、札幌市にて行われます。

いにしえ街道に

追分歓迎のぼりを設置

歴まち商店街組合では、いにしえ街道(中歌町〜姥神町間一、一km)に「歓迎 江差追分」ののぼりを各商店前に二十本設置しました。こののぼりの設置は、いにしえ街道に観光客を迎える歓迎ムードが乏しかったことから、当組合より江差追分会に相談があり、江差追分会としても江差追分の宣伝効果があることから、追分会館前に設置しているものと同じのぼりを提供したものです。

青色の鮮やかなのぼりは観光客の皆さんにも評判は上々です。



与したのは、無論、北前船の乗組員や港の女ばかりではない。東北、北陸の各地から飢饉を逃れてやってきた数多くの老若男女や、飢饉の年ならずとも日頃から蝦夷地の稼ぎに依存せざるをえなかった貧しい農漁村の女房たちが旅立つ夫や家族に寄せた深い愛情もまた、唄の文句や曲調の変遷の中、随所に多彩な形で凝縮されている。

荒い風にもあてない主を

やろか蝦夷地の荒海へ

蝦夷へ行くと言や涙がこぼる

帰るものやら 別れやら

蝦夷は雪国さぞ寒かろう

早くご無事で 帰りゃんせ

これらの文句は、越後追分や江差追分あるいは三下りの文句として、往々に共通の文句として使われており、前記のような妓楼の女たちの座敷芸とは、また一味違った生活感のある庶民の唄として伝承されている。それにしても、万事豊かになって生活様式も意識も感性も、どんどん洋風化し、日本らしさの失われた今日の日本と、貧しくとも心と自然が豊かだった往昔の日本人の姿とを、たまたま追分節の流伝の過程を通じて比較してみても、いまさらに今昔の感を深くしているこのごろの私である。

(学芸部理事)

「第二十三回 本荘追分全国大会」で 長江亜津子さんが優勝

八月十九日、二十日に秋田県由利本荘市で開催された第二十三回本荘追分全国大会大賞の部（八十人出場）で第四十回江差追分全国大会優勝者の長江亜津子さん（札幌市）が全国各地の強豪を抑え見事優勝に輝き、民謡全国大会二冠目を手にしました。

長江さんは、本大会に過去五回出場し、全て入賞。（二十回大会の四位が最高）

決戦会では、追分会東北地区運営協議会長の佐々木東雲氏の伴奏で、情緒豊かな「本荘追分」を熱唱し、会場を訪れた大勢の聴衆を魅了しました。おめでとうございます。



花束を手に熱唱する長江さん

平成十八年度第二回 江差追分会理事会を終了

今年度の第二回江差追分会理事会が七月十五日江差町で開催され、三十二名の理事が出席し、次のとおり承認されました。

- 一、第四十四回江差追分全国大会・第十回江差追分少年全国大会について
- ・開催要綱については、前年度と同様とする。
- ・大会開催スケジュールについては、昨年度よりの変更点は、前年度優勝者のアトラクションを 決選会終了後に変更。
- 二、次年度以降における出場割計算式の変更について
- ・現在の会員数の割合については、熟年の会員数が一般の会員数を上回っている状況にある。現行の全国大会の一般・熟年の出場枠の計算式については、平成九年度の会員比率により算出する計算式を採用していたが、次年度より、平成十七年度の会員比率により算定したい旨の提案があり、各理事から多くの意見が出され検討した結果、今回の提

案を数年推移を見ながら取り進めることで決定した。

三、第四十五回江差追分全国大会記念大会について

・来年の記念大会のイベント内容について、意見交換を行い、各理事からいろんな意見をいただきました。主なものは、「歴代優勝者の中から他の民謡で優勝した人たちの唄を考えては」、「東北民謡と江差追分の関係でやるのも面白いのでは」、「支部長合唱」、「追分に関わる唄でイベントを」等々の意見が出され、それらの案を参考に工夫し少ない経費で内容充実したものを考えてほしいということでもとまりました。この件については、まだ決定しておりませんので、会長より「各地区に持ち帰って、良い案があったら事務局に提案いただきたい」との依頼がありました。

事務局より

平成十八年度第一回

師匠会研修会日程

十月十四日、十五日に江差町で開催されます。参加資格は四級秀以上の有資格者が対象です。日程は次のとおり。

○十月十四日（土）（一日目）
十三時～十七時
○十月十五日（日）（二日目）
九時～正午

場所はいずれもホテルニューえさし

あとがき

□江差高校が単位制選択科目に「江差追分」を開設したことは、追分の本場に最もふさわしい取組みだと思う。全国にも例のない授業だろう。選択授業をしているのは三年生四人だが、三年生一三五人の三％からすれば少ない人数ではない。四人とも郷土の唄に関心をもったと取組んでいる。

□江差追分は日本民謡のなかで特に優れた音楽性を備えた旋律だと音楽家たちが高く評価している。（世界追分祭シンポジウム）民族音楽と評価される郷土文化が、これを機会に若い世代の関心が高まることを期待している。

□追分全国大会がやってきた。熟年層が一般を上まわるほど高齢化が進んでいる。昨年は播磨孝雄さん（六二）が最高齢で優勝を飾った。声だけに頼らず感動を共感させる歌い手を期待したい。

【編集】 岩淵啓介・松村 隆

館 和夫・高田 裕

【企画】 西谷和夫・中川 智

澤田博生